

第五章 落葉宮の物語 夕霧執拗に迫る

[第一段 源氏や紫の上らの心配]

六条院にも聞こし召して(六条院源氏殿に於かれても大将の小野通いをお聞きになって)、いとおとなしうよろづを思ひしづめ(とても冷静で何事にも落ち着いて)、人のそしりどころなく(世間の非難を受けること無く)、めやすくて過ぐしたまふを(穏やかに暮らしていらっしゃるのを)、おもだたしう(面目を施し)、わがいにしへ、すこしあざればみ(自分が若い時に女遊びが過ぎて)、あだなる名を取りたまうし面起こしに(浮名を流しなさった家名挽回と)、うれしう思しわたるを(嬉しく思っていたのを)、

「いとほしう(気懸かりだ)、いづ方にも心苦しきことのあるべきこと(どちらに取っても難しい事情がありそうだ)。*さし離れたる仲らひにてだにあらで(まったく縁故が無い同士でもなく)、大臣なども、いかに思ひたまはむ(藤原殿にしても如何お考えなのか)。さばかりのこと、たどらぬにはあらじ(それくらいのことが分からない大将でもあるまい)。宿世といふもの、逃れわびぬることなり(縁があるなら避けられないことでもある)。ともかくも口入るべきことならず(私ごとやかく口出しするべきではないだろう)」 *「さし離れたる仲らひにてだにあらで大臣などもいかに思ひたまはむ」については、注に<夕霧と雲居雁と落葉宮の関係。致仕太政大臣から見れば、夕霧は我が甥であり、娘雲居雁の夫、落葉宮は我が子柏木の妻であった人。その女性に甥であり娘婿である夕霧が懸想をしている、ということ。>とある。源氏殿が混み入った人間関係を懸念する、というのは笑止でもあり、それだけ年老いて世代交代していることを示しているのだろうが、形の上では混み入って見えても、実質では然程には藤原殿は悩ましい事情ではないような気もする。。女二の宮は未亡人なので、宮自身の皇族意識の難しさはあるにしても、藤原殿が宮の嫁宮としての存在意義を利用できる立場では既に無くなっていて、情として宮と娘を見れば、比べるまでもなく可愛いのは娘のほうだ。それも、入内を断念させられた惜しい娘だ。が、そういう事を根に持つような印象は藤原殿には無い。それでも本当のところは分からない、と思わせるほど藤原殿の実力が大きかった、のかもしれない。

と思す(とお思いになります)。女のためのみにこそ(女の身になれば、生活が男に振り回されることになるので)、いづ方にもいとほしけれと(宮にとっても大将の北の方にとっても厄介な事だろうと)、あいなく聞こしめし嘆く(不都合な問題とお思いになって嘆息なさいます)。

*紫の上にも(殿は紫の上に対しても)、来し方行く先のこと思し出でつつ、かうやうの*ためしを聞くにつけても、*亡からむ後、うしろめたう思ひきこゆるさまをのたまへば(大将と北の方が今まで仲睦まじく暮らしていらっしゃった事や其処へ宮を交えて穏やかならざらむ先の事を考え巡らしなさりながら、自分のことに置き換えて、自分の亡き後の上の身の上が案じられると仰ると)、御顔うち赤めて(上は御顔を赤らめて)、「心憂く(いやなことを仰せになります)、さまで後らかしたまふべきにや(そんなに早く先立たれなさるお心算か)」と思したり(とお思いになりました)。 *「紫の上にも」は上の「いづ方にも」に続く文脈で<紫の上についても、殿は懸念する>という語り口調らしい。が、下文へ続く流れからすると、この「紫の上にも」は<紫の上におかれても>という視点転換の言い方で、本文は「御顔うち赤めて」に繋がり、「来し方行く先～さまをのたまへば」を挿入句とする構文、にも見える。それでも、この文節だけに限れば、殿が「のたまへば」と上に言った事柄は、付け足し挿入の補足話題ではなく、文意全体の原因ないし経緯として説明されていて、前半は殿を主語とした文と見るべき内容なので、この「紫の上にも」

はく殿は紫の上に対しても>と使い換える方が文意が通り易い。そも、「も」は既述話題から想起された別の話題に対象を広げる意識を示す語で、対象自体もとんでもなく幅が広く、考え方も幅が広いので、話者と波長が合えば一体感を共有できるが、少しずれると違和感も強い。*「ためしを聞く」はく見本に見立てる→自分のことに置き換えて考える>。*「なからむのちうしろめたう」は注にく源氏が亡くなった後のこと、後に遺された紫の上の身の上を落葉宮のようになりはせぬかと、心配する。>とある。

「女ばかり(女ほど)、身をもてなすさまも所狭う(生き方も不自由で)、*あはれなるべきものはなし(哀れな身の上になってしまうものはない)。*「あはれなるべきもの」の「べし」は可能と必然の混じった語感で<成りかねない>よりは<なってしまう>。

ものあはれ(四季の移ろいや)、折をかしきことをも(宴席の楽しみも)、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば(見知ることなく引き籠もっていたのでは)、何につけてか(一体何を以て)、世に経る映えばえしさも(この世に生を受けた晴れがましさも)、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは(無常の深い情趣も味わえるというのか)。

おほかた(それに)、*ものの心を知らず(人生の意味が分からず)、いふかひなきものにならひたらむも(役割を果たせないものになっちゃって)、生ほしたてけむ親も(育て申した親も)、いと口惜しかるべきものにはあらずや(それは情けない思いになるものだろう)。*「ものの心」は<道理>とある。「道理」は<物事の正しいすじみち。また、人として行うべき正しい道。>とある。善悪や価値の判断かとも思うが、此処であまり概念じみた抽象論を言う意味はないだろうから、「人として行うべき正しい道」を<使命感=人生の意味>くらいの個人的な話題に矮小化して見て置きたい。というのも、下に「今はただ女一の宮の御ためなり」と孫娘の行く末に照らして、女の人生を考えている節があるので、具体的には、入内して次帝を腹む使命、または、そうした体制を守る使命、あたりのことを言っているように思えるからだ。

心にのみ籠めて(また、思いを胸に秘めたまま)、*無言太子とか(仏教説話にある物言わぬ王子とか)、*小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに(修行僧たちが辛いという無言の行のように)、悪しきこと善きことを思ひ知りながら(ものの善し悪しが分かりながら)、埋もれなむも(口に出さないでいるのは)、*いふかひなし(仏門に奉仕するでもない己が人生を全うしようとする者にとっては、意味の無い事だ)。*「むごんたいし」は注にく「仏説太子慕魄経」に見える。>とある。驚くほど不親切な注で、何を言っているのか分からないが、と言って深入りも面倒なので、字面だけで言い換える。*「小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひ」は注にく『集成』は「つらい無言の行を引合に出す昔の言い伝えのように」と訳す。>とある。「昔のたとひ」を<無言の行>とってしまうのは無理を感じるが、今はこれ以上は分からない。*「言ふ甲斐無し」は<言うに値しない=意味が無い>だろうが、では、「無言太子とか小法師ばら」の人生は意味がない、ということか。そうなのかも知れないが、此処はそれを主張する場でもないだろう。それに、紫の上自身も在家とは言え仏門僧であり、だからこそ、仏説に準えた物言いでもあろうから、仏門僧ならぬ世人の人生なら、という言い方かと思う。

わが心ながらも(結局人生は、自分の考え方次第だが)、良きほどには(良い程合いを)、いかで保つべきぞ(どのようにすれば保てるものだろうか)」

と*思しめぐらすも(と紫の上が女の人生についてお考え巡らしなさるのも)、*今はただ女一の宮の御ためなり(今はただ孫娘の女一の宮を思つてのことなのです)。*「思しめぐらす」の主語は紫の上。だが、この発言は非常に理屈っぽく、与謝野訳文には源氏殿の弁としてあり、確かに、女にしては角々しく、特に紫の上には似合わない印象で、私も殿の発言を疑った。が、言い方は理屈っぽい、話題自体が女自身の人生観であり、下に「ただ女一の宮の御ためなり」とあることが、この発言者が「うしろめたう思ひきこゆるさまをのたま」った殿ではないことを示していて、となると、やはり紫の上の発言ということになる。*「今はただ女一の宮の御ためなり」は注に<『評釈』は「作者は、女一の宮を考えてであると弁解した。つまりここは、紫の上の心に託して作者が自身の心を書き過ぎたため、言いわけのつもりなのである」と注す。女一宮は明石女御が生んだ今上の第一皇女。紫の上が手もとに引き取って養育している(若菜下)。>とある。確かに、この発言文は『評釈』の注に説得力があるほどに理屈っぽく、本当に紫の上には似合わない。が、それでも、この「今はただ」は<今は自分は仏門入りした身なので女の人生を考えるのも偏に>としか読みようはないだろう。もしかすると、紫の上は入信して經典を読み進む内に論理的思考を高めて、理屈っぽい面倒臭い女、いや女を超えた人、になったのかも知れない。それも一興だ。どうせ他人事だし。

[第二段 夕霧、源氏に対面]

大将の君、参りたまへるついでありて(大将君が六条院に参上なさる機会があつて)、思ひたまへらむけしきもゆかしければ(源氏殿は大将が小野の宮に恋焦がれていらっしやるらしい様子も知りたいので)、

「御息所の*忌果てぬらむな(御息所の四十九日も明けるようだな)。昨日今日と思ふほどに(人の死は、昨日今日のことと思つている内に)、三年よりあなたのことになる世にこそあれ(直ぐに三回忌も過ぎてしまうのが世の中というものだ)。あはれに(人生は、はかなく)、あぢきなしや(何ほどのことも無い)。夕べの露かかるほどのむさぼりよ(夜露が掛かる間ほどの短時間の強欲張りに過ぎない)。いかでかこの髪剃りて(どれほどに深くこの髪を剃つて)、よろづ背き捨てむと思ふを(世を捨てて出家したいと思ひながら)、さものだやかなるやうにても過ぐすかな(如何にも呑気に俗世に塗れたまま暮らしてきた事か)。いと悪ろきわざなりや(こんな不徳では良い来世は期待できない)」 *「いみはてぬ」は<忌明けになる=忌明け法要がある>。下に「四十九日のわざ」とある。「らむ」は現状の未来推移推量。「な」は呼びかけ確認。

とのたまふ(と小野山荘の話題をなさいます)。

「まことに惜しげなき人だにこそ、はべめれ(本当に惜しくも無い私のような者だけが生き残りまして)」など聞こえて(などと大将は応じて)、

「御息所の四十九日のわざなど、大和守なにがしの朝臣、一人扱ひはべる、いとあはれなるわざなりや(御息所の四十九日法要などを大和守誰それが一人でお世話申すのでは、とても質素な供養になるでしょう)。*はかばかしきよすがなき人は(有力な縁戚の無い人は)、生ける世の限りにて(生きていた内は自分の交遊で人寄せもあるのでしょうが)、かかる世の果てこそ(こうした死後の寂しさは)、悲しうはべりけれ(悲しいものです)」 *「はかばかしきよすがなき人」というが、御息所は女二の宮の母君であつて、ということは朱雀院の更衣であつて、入山さえしていなければ喪主は朱雀院にな

る筈で、今上帝にも無縁ではなく、死去したとは言え藤君の義理の母に当たった人なので、藤原家としても面倒を見る立場であり、直接には出身家筋の大和守の家人として弔うとしても、「よすが」に事欠くことはないし、それもこの上なく「はかばかし」い「よすが」揃いなのではないか。字面に沿って言い換えはしたが、あまりにも理不尽な物言いに見えて、文意を読み違えているのか、と何度も見直した。が、つまりは大将が、だから自分が手伝わなければならない、ということをお願いしたためだけの屁理屈らしい、と踏んでどうにか納得した。それにしても、だとすると、「はかばかしきよすがなき人」は<私の他には>という意を含んでいるわけで、その背負った物言いには少なからず啞然とする。大将は藤君に宮の世話を託されたが、それはあくまで源君と藤君の二人だけの個人的な信頼関係での話であって、宮および朱雀院側や藤原家側の承認を得たものではなく、ということは、公然の認識では、大将は宮の身内で無い事は勿論だが、藤原家側の代表でもなく、単に亡き夫の友人の一人に過ぎない、という立場である、にも関わらず、まるで主要な身内の一人であるかの自負、を示していて、如何にも非常識だ。いや、だから、この大将の発言は全体が冗句めかした軽口調なのだろう。初めの「まことに惜しげなき人だにこそ、はべめれ」からして、殿の法要準備のお尋ねへの返答としては相当に変だ。もう其処から宮の身内の自負丸出しだ。だから、大将は照れ隠しに何時に無い道化口調で言ったんだろう。冗句は意志の勢いを示す魔力を持っている。事態は人の意志で打開される。多分、此処の大将の言い方を聞いて、源氏殿は、もう手に負えない、と実感したのだろう。当時の読者なら、普通にそう読める書き方なのかも知れない。

と、聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「院よりも弔らはせたまふらむ(朱雀院からも御見舞はあるだろう)。かの皇女、いかに思ひ嘆きたまふらむ(あの王女はどんなにお嘆きなさるだろう)。はやう聞きしよりは(昔聞いていた時の話よりは)、この近き年ごろ(ここ最近)、ことに触れて聞き見るに(何かの折に話題となって)、この更衣こそ(あの御息所は)、口惜しからずめやすき人のうちなりけれ(至らぬ所の無い信頼できる更衣だったようだ)。*おほかたの世につけて(御息所を失うのは、世の中にとって)、惜しきわざなりや(惜しいことだ)。さてもありぬべき人の(もっと生きていて欲しい人が)、かう亡せゆくよ(こうして亡くなって行くんだな)。 *「おほかたの世につけて」などと言い出す意味が分からない。多分、上の発言文に示された大将の気負いぶりを揶揄する、ないし過剰な自負を皮肉の心算で、源氏殿は言ったんだろうが、今の大将に通じるとも思えない。と、いった書き方か。

院も、いみじう驚き思したりけり(兄院も非常に驚き悲しんでいらっしやった)。かの皇女こそは(あの王女のごとは)、ここにもものしたまふ入道の宮よりさしつぎには(ここにいらっしやる入道の宮に次いで)、らうたうしたまひけれ(可愛がっていらっしやった)。人ざまもよくおはすべし(さぞ素晴らしいお方なのだろう)」

とのたまふ(と殿は仰います)。

「御心はいかがものしたまふらむ(宮様の御気立ては如何でいらっしやるのでしょうか)。御息所は、こともなかりし人のけはひ、心ばせになむ(御息所は卒の無い応対ぶりで行き届いた気配りでした)。*親しううちとけたまはざりしかど(親しくは打ち解け頂けませんでした)、はかなきことのついでに(ちょっとしたことで)、おのづから人の用意はあらはなるものになむはべる(自ずから相手の気遣いは気付くものですので)」 *「親しううちとけたまはざりしかど」は注に<『完訳』は「親しく話を交わしたことがあるのに、そらとぼけて言う」と注す。>とある。先にあれだけ入れ込んで、他に目

ぼしい縁者がいないので自分が法事の世話する心算だ、と言っていたのに、大将は此処ではその弔うべき御息所と親しくなかった>と言う。となれば、如何にも大将が胸の内を隠そうとしている事が殿にもはっきり分かる、という場面、なのだろう。

と聞こえたまひて(と大将は応えなさって)、宮の御こともかけず(宮との御仲には触れません)、いとつれなし(まったく取り澄ましています)。

「かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと(これほど生真面目な者が思い初めた恋なら)、諫めむにかなはじ(忠告しても聞かないだろう)。用ゐざらむものから(聞き入れないのなら)、我賢しに言出でむもあいなし(私が理屈を言ってみてもしょうがない)」

と思して止みぬ(とお思いになって殿は何も仰いません)。

[第三段 父朱雀院、出家希望を諫める]

かくて御法事に(というわけで大将は御息所の四十九日法要に)、よろづ*とりもちてせさせたまふ(何かと世話を焼き大和守に準備させなさいます)。*「とりもちてせさせたまふ」は注に<主語は夕霧。「せ」「させ」(使役の助動詞)「たまふ」(尊敬の補助動詞)。『完訳』は「御息所の四十九日の法事。夕霧が主宰し、大和守がこれを準備」と注す。>とある。

事の聞こえ、おのづから隠れなければ(その評判は自然と知れることなので)、大殿などにも聞きたまひて(藤原殿などの耳にもお聞きになって)、「さやはあるべき(そのような、義父に当たる自分を差し置いて源大将が法事を取り仕切るような、事があって良いものか)」など、*女方の心浅きやうに思しなすぞ(妻方が常識知らずのように受け止めて非難なざるのは)、*わりなきや(宮には酷でしょうか)。*かの昔の御心あれば(そうした藤原殿の意向とは別に、昔からの誼で)、君達(亡夫の弟君たちは)、参で訪らひたまふ(法事に列席なさいます)。*「女方の心浅きやうに」という言い方は、藤原殿が自分を<男方(夫側)>と自負していることを示している。宮の夫たる衛門督藤原君は亡くなったが、この婚姻は藤原殿と朱雀院が同意して結んだものであり、それを改める公式な夫婦関係が宮に無い以上は、公式の立場としては、御息所の夫の立場の朱雀院が出家離縁しているので、出身家の葬儀となるにしても、藤原殿が子供の立場の筆頭縁者と目されて然るべき、なのだろう。そうした文意と見て、「さやはあるべき」からの言い換えを明示補語する。また、「思しなす」は、ただ思うだけではなく、それを態度に<なす>たのだろう。*「わりなし」は宮の立場に立った言い方、なのだろう。*「かの」は<あの>だが、手前の話題から少し向こうへ離れた話題に移る意識を示す語で、此処ではあえて<藤原殿とは別に>の意味で「きんだち」に掛かっている、と読んで置く。つまり、藤原殿は列席しなかった、のだろう。

誦経など(僧侶による読経上げなどは)、殿よりもいかめしうせさせたまふ(藤原殿からも厚く依頼の寄付がありました)。これかれも(主だった重役たちからも)、さまざま劣らずしたまへれば(さまざまな供養を上げなされたので)、時の人のかやうのわざに劣らずなむありける(今上帝の女御の法要のように盛大なものでした)。

宮は、かくて住み果てなむと*思し立つこと*ありけれど(宮はこのまま小野の山暮らしで一生を送ろうと出家を決心なされたようだったが)、院に、人の漏らし奏しければ(朱雀院に女房が

内々にご相談申し上げますと)、 *「思し立つこと」は<決心なされた事>だが、「住み果てなむ」は<ずっと暮らして行くこと>だから特に決心を要する事柄ではなく日常の認識に過ぎないが、「かくて」は<小野山での暮らし>であり、それを覚悟するということは<出家>を意味するのだろう。段題にあるように、この段での主題は<宮の出家>らしいので、此処で明示補語して置く。 *「ありけれど」の助動詞「けり」は推量だろうが、漠然と遠い事態を考えるのではなく、目の前の事態から、その本質や真意に気付いて、認識を新たにすると語感。

「いとあるまじきことなり(それは良くない考えだ)。げに(確かに)、あまた(何人もと)、とざまかうざまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど(あれこれと身の関係を持ちなすべきものでもないが)、後見なき人なむ(生活費の無いものが)、なかなか*さるさまにて(なまじ尼庵を結んで)、あるまじき名を立ち(ふしだらな噂が立ち)、罪得がましき時(不徳の罪を犯したなら)、この世後の世(現世も来世も)、中空にもどかしき咎負ふわざなる(定めが無いまま流浪して幸せになれない業を負うことになってしまう)。 *「さるさま」は「かくて住み果てなむと思し立つこと」なのだろうが、その具体的な形は分かり難い。世捨て人となって煩惱を逃れようとしても、皇女らしい侍女を従えた暮らしを立てるために、実際は男を頼るとなると、現世の縁も来世の縁も自分で裏切ることになって更に罪深い、みたいなことだろうか。逃げるが勝ち、ということは生き延びるための状況判断だと思うが、であれば、動物として、逃げる、ということは物理的な危機回避を考えるべきで、人生を逃げる、のでは本末転倒なのではないか。其処まで追い詰められた心理、を救う話みたいなことだから分かり難いのか。難しい話ほど具体的に言ってもらわないと伝わらないが、具体的に言えないから難しい話なのかも知れない。難しい。

ここにかく世を捨てたるに(私が世捨て人になっている上に)、三の宮の同じごと身をやつしたまへる(三の宮が同じように出家なさって)、*すべなきやうに人の思ひ言ふも(今上帝の栄華の甲斐もないように人々が思い言うのも)、捨てたる身には(仏門に帰依した我が身には)、思ひ悩むべきにはあらねど(気になるものではないが)、かならずさしも(必ずしも)、*やうのことと争ひたまはむも(仏門入りだけが救いの道と決まった型のように考えて先を競って出家なさろうとするのも)、うたてあるべし(差し障りがあるだろう)。 *「すべなきやう」は与謝野訳文に<子孫の絶えていく一家>という分かり易い言い方が示されていて興味深い。特に、「一家」という見方は文脈上共感できる。で、この「一家」だが、何と今上帝を輩出している朱雀院なのである。ということは、この「すべて」は<せつかくの今上帝の栄華>を意味する、と読めなくもない気がする。 *「やうのこと」は<定型>だろうか。その「定型」とは、仏門入りか救いの道、という考え、なのだろう。

*世の憂きにつけて厭ふは(世の辛さから逃げるために出家をするのは)、なかなか人悪ろきわざなり(むしろ見苦しいものです)。 *やはり論旨はこういうことのような。こんな風にすっきりと言えるなら、初めに言ってくれば、全体の文意が分かり易いだろうに。出家は逃げではなく、真理探究の修行だ、という言い方は、その真偽はともかく、臨場姿勢としては説得力がある。

心と思ひ取る方ありて(自分なりに理屈を整理して考え方をしっかり持って)、今すこし思ひ静め(もっと冷静になって)、心澄ましてこそ(落ち着いた上で)、ともかうも(決めるべきです)」

とたびたび聞こえたまうけり(と父院は度々宮にご忠告申し上げなされたようです)。

この浮きたる御名をぞ聞こし召したるべき(朱雀院は宮の浮名をお聞きなされての事なのでしよう)。「*さやうのことの思はずなるにつけて倦じたまへる(大将殿との仲が思うようにいかずに世を嫌気して出家なさった)」と言はれたまはむことを思すなりけり(と宮が言われなさるのを懸念なさったのでしよう)。*「さやうのこと」については、注にく『集成』は「夕霧との間に実事があり、その後、夕霧の態度が煮えきらないので出家したと世間に取り沙汰されることを朱雀院は心配する」と注す。>とある。女が男の通いを許して一夜を共にした後に、男の通いが途絶えた、というのが外形上の事実だ。帝の妹宮が近衛大将に振られた、というのは格好の話題だ。宮の体面が保てない、ということはあるだろうが、そういう言い方が出来るということは、キナ臭い見方をすれば、第二勢力が源大将の出世に難を着けて、現政府体制を揺さぶる隙を与えかねない。不穏だ。朱雀院なら藤原長家と次家以下との均衡は具体的に見聞きした筈だ。単に娘の体裁だけを考えての事ではないのだろう。

さりとてまた(そうかといってまた)、「表はれてものしたまはむもあはあはしう(表立って大将と結婚なさると言うのも軽々しく)、心づきなきこと(感心しないことだ)」と、思しながら(と朱雀院はお思いになりながら)、恥づかしと思さむもいとほしきを(宮が恥づかしいとお思いになるのも気遣って)、「何かは(何も其処までは)、我さへ聞き扱はむ(自分だけは口出ししないで置こう)」と思してなむ(とお思いになって)、この筋は、かけても聞こえたまはざりける(大将との仲については何も宮に申し上げなさらなかったのです)。

[第四段 夕霧、宮の帰邸を差配]

大将も(源の大将殿も)、

「とかく言ひなしつるも(あれこれ言って取り成してみたが)、今はあいなし(もう無理だ)。かの御心に許したまはむことは、難げなめり(宮の方から私を受け入れる気になる事は期待できそうにない)。御息所の心知りなりけりと(御息所が承知していた仲だと)、人には知らせむ(周りの者には知らせよう)。いかがはせむ(それしかない)。

亡き人にすこし浅き咎は思はせて(亡くなった人に少し考えが浅かった罪を負わせて)、いつありそめしことぞともなく(いつ始まった仲というでもなく)、*紛らはしてむ(既に夫婦関係にあるというようなことにして、話を進めてしまおう)。さらがへりて(今さら改めて)、懸想だち(恋情を訴えて)、涙を尽くしかかづらはむも(涙ながらに口説くというの)、いと*うひうひしかるべし(そんな初々しさはあまりにワザとらしいだろう)」 *「紛らはしてむ」は<誤魔化してしまおう>だが、何を誤魔化すのかと言えば、「いつありそめしことぞ(いつ始まった仲なのか)」なのだから、もう疾うの昔に始まった<古い仲>だということにする、という文意で、そういう前提で手筈を整えるという意志を「む」は示している、のだろう。 *「うひうひし」は<うぶだ、気恥ずかしい>だが、此处では<照れ臭い>という不慣れで臆する気持というよりは、いろいろ言葉を労した挙句に「今はあいなし」と思い至り、今や実力で夫婦関係を既成事実化しようとしているのだから、そういう通い始めの手順を踏む事が、あまりに形骸化してワザとらしい、のだろう。だから大将は、もっと大胆に事を進める、という心算らしく、正にその通りの文脈で下に続く。

と思ひ得たまうて(と考えをまとめなさって)、一条に渡りたまふべき日(宮が一条邸にお帰りになるに相応しい吉日を)、*その日ばかりと定めて(帰宅日と設定して)、大和守召して(大和守

に言い付けなさって)、あるべき作法のたまひ(宮を迎える手筈を教え)、宮のうち払ひしつらひ(邸内を掃除して飾り付けを新しくし)、さこそいへども(何と言っても)、女どちは(女所帯で)、草茂う住みなしたまへりしを(庭の手入れも行き届かずに暮らしていらっしやったのを)、磨きたるやうにしつらひなして(磨いたように整えて)、*御心づかひなど(婚礼の飾り付けについては)、あるべき作法めでたう(然るべき様式で目出度く)、壁代(かべしろ、仕切り幕)、御屏風(みびやうぶ)、御几帳(みきちやう)、御座(おまし、御座席)などまで思し寄りつつ(などまで気を配りつつ)、大和守にのたまひて(大和守に命じて)、*かの家にぞ急ぎ仕うまつらせたまふ(守の家で当日までは内々に準備させて置かせなさいます)。*「その日ばかり」は注に<『集成』は「帰宅、しかも結婚と夕霧は決め込んでいるので、暦によって吉日を選ぶ」と注す。>とある。従う。*「みこころづかひ」には<祝儀。心付け。>の意もあると大辞泉にあるので、これは<婚礼の祝儀様式>のことだろう。*「かの家にぞ」は<大和守の家で。>と注にある。「ぞ」の念押しは、守の家で内々に保管準備しておいて、当日一気に運び込んで飾り付けるのだろう。つまり、秘密裏に事を運ぶことで、事前に婚礼準備が宮に知れて、帰宅を拒まれるのを避けた、という意味かと思う。

その日(その当日に)、*我おはしみて(大将は一条邸に待ち構えなさって)、御車、御前などたてまつれたまふ(小野山荘に宮の迎えの御車や護衛たちなどを差し向け申し上げなさいます)。宮は、さらに渡らじと思しのたまふを(宮はそれでもなお帰宅したくないお気持ちを仰るが)、人びといみじう聞こえ(女房たちが是非にとお勧め申し)、大和守も(従兄妹の大和守も)、*「我おはしみて」は<自分は留まっていまして>で、大将は一条邸で宮を待ち受ける、らしい。

「さらに承らじ(そうは参りません)。心細く悲しき御ありさまを見たてまつり嘆き(叔母上の急逝に際し、あなた様の心細くお悲しみの御様子を拝見し憂いて)、このほどの宮仕へは(此処までの御世話は)、堪ふるに従ひて仕うまつりぬ(見るに見かねてお仕え申しました)。

今は(そろそろ)、国のこともはべり(任国の公務もありますので)、まかり下りぬべし(私は赴かねばなりません)。宮の内のこと(一条宮邸の管理も)、見たまへ譲るべき人もはべらず(任せられる者も居ません)。いと*たいだいしう(実に困ったことで)、いかにと見たまふるを(どうしたものかと案じておりました所)、かく*よろづに思しいとなむを(このように大将殿が宮邸を万事お気遣い下さり整備なさいまして)、げに(確かに)、*この方にとりて思たまふるには(あなた様にとって考えてみますれば)、かならずしもおはしますまじき御ありさまなれど(この小野山荘に母上が偲ばれて、必ずしも一条邸にお帰りになりたくないお気持ちなのでしょうが)、さこそは(そのような遁世は)、いにしへも*御心にかなはぬためし(皇女であっても、古くにも思い通りにならない例は)、多くはべれ(多くございます)。*「たいだいし」は「怠怠し」と表記され<なござりだ、不都合だ、怠慢だ>と古語辞典にある。とにかく、管理不行き届き→困ったこと、なのだろう。*「よろづに思しいとなむ」は「宮の内のこと」だが、「よろづ」の中には婚儀も含まれているのだろう。従って、宮が一条邸に戻るということは、大将の世話になる、ということであり、そのことを宮も受け入れた、ということになる。そして宮も、いくら何でもさすがに、そういう理解をしていた、に違いない。が、この大和守の発言は、その事情は宮に知らせながらも、大将との婚儀を無理強いする事なく、出来るだけ宮の立場に寄り添った言い方をしているものと読みたい。重役の近衛大将に抗し得ない大和守の身分ではあっても、王家親族の心情までは売らないだろう。*「この方にとりて思たまふる」は注に<『集成』は「ご結婚ということで考えてみますと」。『完訳』は「あちらさまのご懸想からというふうを考えますと」と訳す。>とある。「この方にとりて」は<ある意味では>なのだろうか。「この方」は「こ

なた」で、直接に対面しているならくあなた＝宮＞のことではないのか。与謝野訳文はくあなた＞と取っている。私もそう読みたい。確かに、宮は大将との結婚を拒んでいる。そして、一条邸に戻る事が大将との結婚を意味することも、宮邸の整備を大将が取り仕切ったのだから、さすがに宮にも理解できただろう。しかし、此処の「おはしますまじき御ありさま」はく宮の母御息所を慕う気持＞と読んで置きたい。でない、「御心にかなはぬためし」が如何にも人身御供に見えて、宮が惨め過ぎる。＊「みこころにかなはぬためし」は注にく皇女が自分の意に反して再婚した例は多くある。＞とある。私は、出家が適わぬ例、と読んで置く。

＊一所やは、世のもどきをも負はせたまふべき(しかし一条邸で大将のお世話を受けなさるのは、あなた一人が世間の非難を負いなさるようなことではありません)。いと幼くおはしますことなり(それはとても子供じみたお考えです)。たけう思すとも(気負いなさっても)、女の御心ひとつに(女一人の御器量で)、わが御身を*とりしたため(その御身分を賄うだけの)、*顧みたまふべきやうかあらむ(生計をお立てになれましようや)。なほ(やはり)、人のあがめかしづきたまへらむに助けられてこそ(それなりの殿御が大事にお世話なさる援助を受けてこそ)、深き御心のかしこき*御おきても(深い御心の尊い御息所の御供養も)、それに*かかるべきものなり(その御蔭で施せるものなのです)。＊「ひとところやは」は注にく落葉宮をさす。「やは」--「負はせたまふべき」反語表現。あなた一人だけが非難を受けるのでない。＞とある。宮は一面では、女房や郎党の生活を成り立たせることに責任がある。「いと幼くおはします」にはその自覚の欠如を責める語感も有りそうだ。が、それはそれとして、注目すべきは、此処から語調が変わる事だ。上文までは宮の心情を汲んでいたが、此処からは大和守は理詰めで宮を説得する。だから、この「世のもどき(世間の非難)」は対象がく小野山荘で遁世できない事＞からく一条邸で大将の世話を受ける事＞に一気に代わっている。話題転換というよりは、すり替えの感もある視点転換だが、上の「多くはべれ」とこの「一所やは」の間には、語り手は一呼吸置かずにはいられないだろう。その息遣いまで明示補語してみる。＊「とりしたたむ」はく片付ける>。「したたむ(認む)」はくまとまった形に整える>。「身を取り認む」はく身分を保つ、ように暮らす>あたりか。＊「かへりみる」はく面倒を見る、世話をする>だからく生計を立てる>。＊「おんおきて」はくあなたの生活方針＝御息所の供養>なのだろう。＊「かかる」はく(一時的に)作用する>だろうか。「それに」が「こそ」の限定条件に呼応して、全てはくその「助け」に掛かっている＝その御蔭>みたいな言い方になっている、のなら、今でもよく使う言い方ではある。

＊君たちの聞こえ知らせたてまつりたまはぬなり(君たちがよく事情をお聞かせ申し上げないから、宮はまだお分かりいらっしゃらないのだ)。かつは(そのくせ)、*さるまじきことをも(不都合な事を)、御心どもに仕うまつりそめたまうて(勝手に取り計らい申し上げて)」。＊「きみたち」は注にく「君たち」は女房たちをさす。『集成』は「一転して、女房たちに苦情を言う」と注す。＞とある。＊「さるまじきこと」は注にく手紙の取り次ぎなどをさす。＞とある。特に具体的な何かを言うのではなく、余計な事をして、みたいな嫌味だろう。身近で日常の世話しているのだから、不都合な事など細々と言い出せば切りがない。

と、言ひ続けて(と話し続けて)、*左近、少将を責む(側近女房の左近や小少将を責めます)。＊「さこん」は前に登場しただろうか。分からない。「少将」はく小少将>。

[第五段 落葉宮、自邸へ向かう]

集りて聞こえこしらふるに(そこでいよいよ女房たちが、寄って集って説得申し上げ合うので)、いとわりなく(どうにもならず)、あざやかなる御衣ども(喪服から色鮮やかなお召し物に)、人び

とのたてまつり替へさするも(女房たちが着替えさせ申し上げるのにも)、われにもあらず(呆然自失で)、なほ(今なお)、いとひたぶるに削ぎ捨てまほしう思さるる御髪を(一途に出家して剃髪したく思えなさる御髪を)、かき出でて見たまへば(梳かして御覧になると)、六尺ばかりにて(六尺ほどはあって)、すこし細りたれど(少し細くなっていたが)、人はかたはにも見たてまつらず(整髪申し上げる女房は少しも見劣りするとは思ひ申し上げないで、手入れ申したが)、みづからの御心には(宮御自身の御心では)、

「いみじの衰へや(ひどい衰えようだ)。*人に見ゆべきありさまにもあらず(結婚など出来る姿ではない)。さまざまに心憂き身を(どうにも情けない我が身であることよ)」 *「人に見ゆ」は<男の人に会う>という言い方が<結婚する>という意味の成句だろう。与謝野訳文に従う。

と思し続けて、また臥したまひぬ(と思ひ続けなさって、また臥せってしまいなさいました)。

「時違ひぬ(急がないと間に合いません)。夜も更けぬべし(夜が更けてしまいます)」と、皆騒ぐ(と皆が騒ぎます)。

時雨いと心あわたたしう吹きまがひ(時雨がひどく気忙しく吹き荒れて)、よろづにもの悲しければ(なんとも物悲しく、宮はこう独詠なさいます)、

「のぼりにし峰の煙にたちまじり、思はぬ方になびかずもがな」(和歌 39-18)

「火葬の煙にたちまじり、小野山の上に昇りたい」(意識 39-18)

*注に<落葉宮の独詠歌。『河海抄』は「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」(古今集恋四、七〇八、読人しらず)を指摘。夕霧の意のままになるよりは、ここで死にたい、の意。>とある。訳文は<母君が上っていった峰の煙と一緒にあって、思ってもいない方角にはなびかずにいたいものだわ>とある。けぶりーなびくーきもち、の詠み込みは平易で素直な感じ。だが、率直さも意識ほど露骨過ぎると下品か。

心ひとつには強く思せど(宮はご自分では出家を気強くお思いになるが)、そのころは(その時には)、御缺などやうのものは(ハサミなどの刃物は)、皆とり隠して(すべて宮から遠ざけて)、人びとの守りきこえければ(女房たちが仕舞い申ししていたので)、

「かくもて騒がざらむにてだに(そんな大袈裟にしなくても)、*何の惜しげある身にてか(何も身分あるこの身で)、をこがましう(愚かしく)、若々しきやうには*ひき忍ばむ(子供じみて隠れて髪を下ろすようなことはしない)。*人聞きもうたて思すまじかべきわざを(今出家するのは如何にも大将に振られた身を憂いての事のように、人聞きの悪い噂が立ちそうだし)」 *「何の惜しげある身にてか」は此処だけを取り出すと<何の価値がある身か=死んでも惜しくない>みたいな反語表現に見えるが、注には「身にてか」の語用について<係助詞「か」は「忍ばむ」連体形に係る。こっそり髪を下ろそうか、けってせぬ。反語表現。>とあり、この構文に於いては「身にてか」は<そういう身なので>という意味に成り、「惜しげある」は<価値がある=見所がある=身分が高い=責任がある>くらいに思い巡らせば、文意も通る。 *「引く」は<引き抜く、取り去る→髪を下ろす>ということらしい。 *「人聞きもうたて思すまじ」は<宮は大将に振られたので世を悲観して出家した>という体裁の悪い外聞、をいうのだろう。ということは、外形上の事実としては、既

に宮は大将の女になっている、という認識は宮自身にもあるらしい。そのように人目や世の中の評価を意識することは、自分を客観視する落ち着きを取り戻した事の表れでもあり、世の中の仕組みや現実に照らして自分を見つめ直す、ということにも繋がるので、大将源君の思惑に少しは目が出てきたようにも見える。

と*思せば(とお思いになって)、その本意のごともしたまはず(出家はなさいません)。 *「思せば」とあるから、上文は発言文ではなく内心文ということになる。内容が宮に不似合いなほど率直なので、発言文としても相当に意味深い。内心文であれば、何かを意図した計算ではなく、本人の心情そのものとして語られているわけで、そういう考えで「本意のごともしたまはず(出家なさない)」という宮の事情を作者は説明をしていることになるので、この一文は重く受け止めたい。

人びとは、皆いそぎ立ちて(女房たちは皆引越しに取り掛かって)、おのおの(各自)、櫛(くし、整髪道具)、手篋(てばこ、化粧箱)、唐櫃(からびつ、衣類箱)、よろづの物を、はかばかしからぬ袋やうの物なれど(色々な物を特に豪華でもない袋詰めした物などだが)、皆さきだてて運びたれば(それらを皆先に運び出させているありさまなので)、

一人止まりたまふべうもあらで(宮も一人山荘に残りなさることも出来ず)、泣く泣く御車に乗りたまふも(泣く泣く御車にお乗りになるも)、傍らのみまもられたまで(隣の空席にばかり目が行きなさって)、こち渡りたまうし時(こちらの山荘に移って来られた時に)、御心地の苦しきにも(母御息所が御気分が悪いのにも関わらず)、御髪かき撫でつくろひ(宮の御髪を梳かし揃えて)、下ろしたてまつりたまひしを思し出づるに(手を取って下車させ申して下さったことが思い出されて)、目も霧りていみじ(目が涙でひどく霞みます)。

*御佩刀に添へて経篋を添へたるが(御息所の形見の品として、御守刀と共に経篋箱を積んであったが)、御傍らも離れねば(宮はそれらを肌身離さず)、 *「御佩刀(みはかし)」は御守刀。「経篋(きやうばこ)」は仏教経典を入れた箱。注にはく「御佩刀」は守刀。「経」は法華経か。いずれも亡き母御息所から贈られた形見の品。>とある。

「恋しさの慰めがたき形見にて、涙にくもる玉の篋かな」(和歌 39-19)

「慰めがたきカタミにて、涙にくもる玉のハコ」(意識 39-19)

*注にく落葉宮の独詠歌。「形見」「篋」の掛詞。>とある。「篋(かたみ)」はく竹製の目の細かい籠(かご)。勝間(かつま)。堅間(かたま)。>と大辞林にある。また、「篋(かたみ)の水」という言い方はく篋に汲んだ水。すぐに漏れてしまうことから、物事の頼みがたいことをいう。>とある。よすがの形見が頼みがたい、とは洒落ている。そして「篋」はく物を入れるための器=はこ=箱、篋>だ。歌意は素直な哀悼にも見えるが、詠み方は大喜利の掛詞なので、しみじみとした心情よりは、ウマイ言い回しの印象。

*黒きもまだしあへさせたまはず(経箱は喪中用の黒漆塗りのものをまだ新調なさらず)、かの手ならしたまへりし螺鈿の篋なりけり(御息所がお使いになっていた螺鈿の箱なのです)。誦経にせさせたまひしを(平癒祈願にお使いになっていたものを)、形見にとどめたまへるなりけり(宮は母の形見として残していらっしやったのです)。*浦島の子が心地なむ(まるで玉手箱を抱いた浦島太郎みたいです)。 *「黒きもまだしあへさせたまはず」は注にく喪中に用いる黒漆塗の経箱もまだ新調せ

ずに。>とある。こういう文意は作法の知識が無いと読めない。感服する。 *「浦島の子が心地なむ」は作者のちょっとした冗句なのか。それとも意味深な暗示なのか。どっちもありそうで、此処では分からない。

[第六段 夕霧、主人顔して待ち構える]

おはしまし着きたれば、殿のうち悲しげもなく、人気多くて、あらぬさまなり(宮が一条邸にお着きになると、邸内は喪中の悲しげに沈んだ様子もなく、立ち働く人も多くて、印象が違います)。御車寄せて降りたまふを(御車を寄せて降りようとなさるが)、さらに故里とおぼえず(とても以前の我が家とは思えず)、疎ましようたて思さるれば(馴染めず嫌気を催されて)、とみにも下りたまはず(直ぐにはお降りになりません)。いとあやしう(また変に)、若々しき御さまかなと(子供っぽく拗ねていらっしゃるのかと)、人びとも見たてまつりわづらふ(女房たちも宮には困り申し上げます)。

殿は(大将殿源君は)、東の対の南面を、わが御方を、仮にしつらひて(東の対の南面を自分の部屋と仮に構えて)、住みつき顔におはす(主人顔をしていらっしゃいます)。三条殿には(自邸の三条邸では)、人びと(女房たちが)、「にはかにあさましようもなりたまひぬるかな(急に軽々しいお暮らしぶりをなさったものです)。*いつのほどにありしことぞ(いつの間に一条邸を整備なさったのでしょ)う)」と、驚きけり(と驚いていました)。 *「いつのほどにありしことぞ」とあるのだから、源君はよほど慎重に奥方に知られないように一条邸の整備を進めたい。四段に「大和守にのたまひて、かの家にぞ急ぎ仕うまつらせたまふ」とあったが、それは宮に婚礼用の部屋飾りを悟られないようにとの配慮かと思ったが、また、それもあったかも知れないが、此処の文を読む限りは、むしろ源君は奥方の反感を恐れたようだ。

*なよろかにをかしばめることを(物腰柔らかく風流めいた事を)、好ましからず思す人は(好ましくない生活態度だと思いになる人は)、かく*ゆくりかなることぞうちまじりたまうける(こんな風に思い掛けないことを起こしなされるものだ)。 *「なよろかにをかしばめることを好ましからず思す人」とは大將のことらしい。が、近衛大將は芸能者である。近衛の舎人を武官とみれば、堅物という印象も相応しいのかもしれないが、近衛だろうと兵衛だろうと衛門だろうと警備府とはいえ役職者は指揮官であり、指揮官は政治家だ。武官は戦闘、文官は事務、だが、それは実務者が任の限りに於いて果たすべき職務であって、どちらも現実社会を運営管理するに必要なもので、それぞれの出番は局面に応じるのであり、文官も仕事は真剣勝負だ。ただ確かに戦時現場に赴くのは武官であり、調停にはその指揮官が臨む。が、指揮官同士は戦闘はしない。話を着けるのが仕事だ。相手を納得させて、場を治めるのは、言葉を含めた芸能文化の説得力だ。これは政治家の資質であり仕事だ。特に近衛は帝の側近であってみれば、その文化性は生命線だ。だから本来は大將こそが「なよろかにをかしばめる」人であるべきで、光君の活躍は正にそういう線上にあった。藤原殿も然りだ。だから、此処で言う「なよろかにをかしばめる」は字面通りの意味ではなく、大將の実体を示すと言うよりは<女関係に不精だ>という意味で大將の堅物ぶりを揶揄する冗句として、女房たちが言っていた、と読むべきなのだろう。しかし、実際には大將は古くから五節舞姫を妾に囲っていて、召人にも数多く手を出していたらしく、単に人間関係の煩わしさを避けていただけ、みたいなのが私の印象だ。ただ、それだけに、その煩わしさも厭わずに、また実際に多額の散財もして、一条に別宅を構えるという、大將の意気込みは並大抵のものではない。やはり王家の魔力なのだろう。 *「ゆくりか」は<思いがけないさま。突然なさま。>また<不用意なさま。軽はずみなさま。>と大辞林にある。何度か使われている語だが、妙に馴染めない変な語感だ。というのも、つく<ゆくりしたさま>と混同しがちだからだが、その意味の語は「ゆくらか」と言うらしい。「か」は加減の程度を示す接尾語。ただ、「ゆくり」の語感としては<ゆった

りした大きなうねりが進むさま>が「ゆくら」と共通の概念としてあって、「ゆくり」はそれが津波のように急に押し寄せてく来る>こと、「ゆくら」はそれを遠くで<見ている>こと、をそれぞれ示すのではないか、などと考えてみるが、どうなのだろう。この語は語感がつかめないで、そういうことだと理解し易い気もするが、そんな説明は手許の資料には何処にも書いてないので、全く別の語かも知れない。

されど(しかし三条の女房たちは大将の事を)、年経にけることを(数年にわたる女遊びを)、音なくけしきも漏らさで過ぐしたまうけるなり(噂も立てず気配にも出さずに隠していらっしやっただのだ)、とのみ思ひなして(と宮と大将は昔から出来ていたようにだけ思い込んで)、かく(真相は斯くも未だに)、女の御心許いたまはぬと(宮は受け入れていらっしやらないと)、思ひ寄る人もなし(知る人も居ません)。とてもかうても、宮の御ためにぞいとほしげなる(何もかもが宮にとってはとても辛そうな事態です)。

*御まうけなどさま変はりて(宮の設けの引越し祝いは精進料理で)、*もののはじめゆゆしげなれど(大将にしてみれば新婚当初の祝儀としては縁起が悪いところなのだが)、*もの参らせなど(その宴席などが片付いて)、皆静まりぬるに(皆が寝静まった頃に)、渡りたまて(大将は寝殿にお越しなさって)、少将の君をいみじう*責めたまふ(小少将に強く宮の寝所に案内するよう催促なさいます)。 *「おんまうけ(御設け)」は<宴席、およびその支度>のことで、此处では<宮主催の引越し祝いの夕餉>だろうか。注には<新婚の祝儀、喪中のため普通の祝儀とは違うさま。>とある。「さま変はりて」は膳が精進料理だった事を言っているらしい。非常に分かり難い文意だ。大将は「住みつき顔におはす」のだから、是が、内祝いながらも、婚礼の祝儀である可能性はある。が、そうであるなら、その差配は大将の意向に沿った様式で賄われるので、「もののはじめゆゆしげ」になる筈はない。それが、実際は「もののはじめゆゆしげ」だったのであり、大将は「皆静まりぬるに渡りたまて」とあった、ということは、この「御まうけ」は宮側の、宮側だけの、従って宮の意向による慰労会のようなもので、殿や殿側の出席はなかった、という事情に見える。一応そのように読んで置こうとは思いますが、それにしても、あまりにも舌足らずで、これは当時の読者にしても、それぞれの祝儀作法を具体的に知っていたとしても、普通とは違う複雑な事情の引越しなのだから、もっと丁寧に推移描写が無いと、混乱したのではないか。まして私などには、本当に面食らう難文だ。 *「もののはじめゆゆしげなれど」は場面描写と言うよりは、語り手が大将の意に沿って、事態の意味を補足する為に言った軽口めいた差し出口、と読んで置く。 *「もの参らせなど」は注に<「など」の下に「して」などの語句が省略。>とある。「まゐらす」は宮に対する謙讓表現だろうが、此处では<宮に食事を差し上げる>という宮個人に対しての意味ではなく、宮主催の<御宴席が行なわれる>という言い方なのだろう。「もの」は<宴席一式>で、「もの参らせ」は連用名詞で<実際の御宴会飲食(の一頻り)>。 *「責む」は<（難を）責める、咎める>でもあるが<催促する、強要する>でもあり、此处では<宮に会わせろと強要した>ということらしい。少なくとも、「御まうけ」が「もののはじめゆゆしげ」なることを<非難した>のではないようだ。が、一見紛らわしく、私は間誤付いた。

「御心ざしまことに長う思されば(御愛情を本当に末永くとお思いでしたら)、今日明日を過ぐして聞こえさせたまへ(今日明日を過ぎてからお申し出下さい)。なかなか(却って)、立ち帰りてもの思し沈みて(帰宅なさってから御息所が偲ばれて)、亡き人のやうにてなむ臥させたまひぬる(宮は亡き人に寄り添うように肩身の品を抱えて臥せっていらっしやいます)。こしらへきこゆるをも(初夜の段取りを整え申そうにも)、つらしとのみ思されれば(宮が辛いとばかりお思いになるので)、*何ごとも身のためこそはべれ(なにぶん使用人の分際ですので)、いとわづらはしう(とても困りまして)、聞こえさせにくくなむ(そのようには申し上げられません)」 *「何ごとも

身のためこそはべれ」は注に<「身」は、我が身。『集成』は「挿入句。女房の分際として、不興を買うわけにはいかない、の意」。『完訳』は「「はべれ」まで挿入句。主人の機嫌を損ねては、女房として身が立たない意。使用人根性の弁」と注す。>とある。確かに、「ために」は<利するものとして>の意の他に<～であるが故に>という理由説明の語用がある。

と*言ふ(と小少将は言い張ります)。 *「いふ」は「聞こゆ」の謙讓表現ではない事が、大将に対して失礼なのではないか、とも思えるが、それ以上に「言ふ」は<言い張る>の主張するという語感がありそうだ。

「*いとあやしう(それは変だ)。推し量りきこえさせしには違ひて(ご帰宅あそばす以上は私との婚儀をご承知の上と、ご推察申し上げていたのに反して)、いはけなく心えがたき御心にこそありけれ(幼く聞き分けのない御考えではないか)」 *「いとあやしう」と思うほど、大将は大和守や小少将に宮の説得を念入りに頼んでいた、という事情が窺われる。また、常人なら感服するほどの物的援助や屋敷の手入れを見せ付けて、受け入れを迫ったにも関わらず、物質攻勢の効かぬ宮育ちに拒まれる、という大将の悲哀。飛ぶ取り落とす近衛大将も思い通りにならない恋がある、という相当な三枚目ぶりだ。が、どんな立場の人でも手を伸ばせば届きそうな高嶺の花に血道を上げるものなのだろう。が、庶民からすれば、雲上の宮様や大将など初めから実感できる存在ではなく、逆に情けない構図だけが浮き上がって滑稽だ。是は、宮廷物語を記した作者の意図の一つに違いない。

とて(と言って大将は)、思ひ寄れるさま(想定なさっている宮の処遇を)、人の御ためも、わがためにも(宮にとっても大将自身にとっても)、*世のもどきあるまじうのたまひ続ければ(世間の非難を受けないように厚くしようと考えていることを仰り続けるので)、 *「世のもどきあるまじう」は注に<『集成』は「落葉の宮の処遇についてのこと。雲居の雁と並ぶ正室としてお扱いするということなのであろう」と注す。>とある。「正室としてお扱いする」ということなのかも知れないが、三条の夫人との関係に於いて、その具体的な意味が私には分からないので、此处での明示補語は避ける。

「いでや(いえ、もう)、ただ今は(とにかく今は)、またいたづら人に見なしたてまつるべきにやと(宮もまた故人と拝し申さねばならないのかと)、あわたたしき乱り心地に(私自身が気忙しく取り乱しておりまして)、よろづ思たまへわかれず(そうしたことまでは、とても聞く耳がございません)。*あが君(どうか、御主人様)、とかくおしたちて(何かと強引に)、ひたぶるなる御心なつかはせたまひそ(猛り心をお奮いなりませんように)」 *「あが君」は注に<集成「多く、相手に懇願する時に呼び掛ける言葉」と注す。>とある。一般的に懇願する言い方なら<どうか、ぜひ>の意味なのだろうが、それならそう言えば良い。責められているこの状況で、小少将が大将を「あが君」と言うのは、大将を主人と認識して、基本的には意向に従う姿勢を示す、更に言えば、そういう口調で大将を持ち上げる、という意図が小少将にはあるのだろう。

と手をする(と小少将は手をすり合わせて懇願します)。

「*いとまだ知らぬ世かな(新郎に会うのが死ぬほど厭だとは、聞いたこともない話だ)。憎くめざましと(憎く目障りだと)、*人よりけに思し落とすらむ身こそいみじけれ(前夫より格段に劣ると宮がお思いなさるこの身の惨めさよ)。いかで人にもことわらせむ(ぜひ誰かにどちらの言い分が道理に適うか判じてもらいたいものだ)」 *「いとまだ知らぬ世かな」は<納得できない事情だ>みた

いな言い方だろうが、与謝野訳文に「聞いたことも見たこともないお取り扱いだ」とあり、その感性に敬服する。 * 「人よりけに」は注に<『完訳』は「柏木よりも。「身」は夕霧自身」と注す。>とある。

と(と大将は)、いはむかたもなしと思してのたまへば(言うまでも無く自分に理が有ると思ひになっておっしゃると)、さすがにいとほしうもあり(さすがに小少将は大将がとても勿体無くも思えて)、

「まだ知らぬは(聞いたこともない話というのは)、げに世づかぬ*御心がまへのけに*こそはと(確かに世間知らずな宮のお考えによるものとは存じますが)、ことわりは(だとすると、そういう方に道理を求めなされるのは)、げに(実の所)、いづ方にかは寄る人はべらむとすらむ(どちらに理が有る事になるのでございましょう)」 *「みこころがまへのけ」は、渋谷訳文は主語を避け、与謝野訳文は主語を大将としてある。私は、「げに世づかぬ」と小少将は大将に同意しているのだから、この「御心」は<宮のお考え>だ、と思う。で、宮が未熟なのだから「ことわりはげに」の「げに」は、その未熟な宮に無理を言うのは誰ですか、という皮肉になっている、のだろう。 *「こそはと」は下に<思ひたまへ>が省かれている、のだろう。

と、すこしうち笑ひぬ(と少し愛想笑いをします)。

[第七段 落葉宮、塗籠に籠る]

かく心ごはけれど(小少将がこのように強気でいても)、今は(このように御膳立てが済んだ今となっては)、堰かれたまふべきならねば(大将は誰に邪魔立てされなされることもないので)、やがてこの人をひき立てて(そのままこの人を先導に立たせて)、推し量りに入りたまふ(見当を付けて宮のお部屋にお入りなさいます)。

宮は、「いと心憂く(何て厭な)、情けなくあはつけき*人の心なりけり(情けなく見下げた人だったのか)」と、ねたくつらければ(と小少将の裏切りが癪に障って辛いので)、「若々しきやうには言ひ騒ぐとも(子供じみていられると言われても、構わない)」と思して、塗籠に御座ひとつ敷かせたまて(とお思ひになって塗籠に布団を敷かせなさいして)、うちより鎖して大殿籠もりにけり(中から鍵を下ろしてお寝みなさいしてしまいます)。「これもいつまでにかは(これもいつまで続けられるだろうか)。かばかりに*乱れ立ちにたる人の心どもは(ここまで狂い出してしまった女房たちなのでは)」、いと悲しう口惜しう思す(と悲しく悔しくお思ひになります)。 *「人の心なりけり」は注に<小少将の君をさす。完訳「夕霧への憤りはもちろん、手引した小少将にも裏切られたと、今にして「一けり」と気づく」と注す。>とある。大将なら<御心>と言うのだろうか。小少将は宮に、大将の入室を何とか阻む、とでも言っていたのだろう。 *「乱れ立つ」は<狂い出す>くらいのきつい言い方に思う。が、宮の認識はやはり大人気無い。大将が取り仕切っていることを大和守から聞かされた上で一条邸に戻る事の意味は、宮も頭では分かっている、かの記事はあった。絶対に小野山荘を離れない、という選択肢は宮には実はあった。どうしても出家する、という選択肢もあった。が、結局流された。それを、今さら女房たちを「乱れ立ちにたる」と言うのは、自分可愛さの責任逃れだ。否、どういう選択をしても、自分可愛さ、からではあるのかも知れないが、質素な生活や厳しい修行は自分で責任を取るわけで、その上解雇した郎党たちから怨まれる恐れもある。が、一度今の生活を守ると決断したからは、その責任を他人に擦り付けて、自分は良い子で居ようとするのは卑怯だ。が、それも果敢無い抵抗と自覚しながらなら、いくら可愛げもあるだろうか。

男君は(新郎の源君は新婚早々の締め出しに)、めざましうつらしと思ひきこえたまへど(信じられないほど辛いと宮に訴え申しなさるが)、かばかりにては(こうして中に籠もっては)、何のもて離ることかはと(結局逃げられないと)、のどかに思して(気長にお考えになって)、よろづに思ひ明かしたまふ(会えた後の事を色々と考えて夜を明かしなさいます)。*山鳥の心地ぞしたまうける(雌雄が別々に寝るといふ、山鳥夫婦の気分がなさいます)。*「やまどり」は注に<『異本紫明抄』は「昼は来て夜は別るる山鳥の影見る時ぞ音は泣かれける」(新古今集恋五、一三七一、読人しらず)。『河海抄』は「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かも寝む」(拾遺集恋三、七七八、柿本人麿)を指摘。山鳥は雌雄が峯を隔てて別々に寝るとされていた(俊頼髓脳・奥義抄・袖中抄)。>とある。

からうして明け方になりぬ(辛い夜が明けます)。かくてのみ(この状態のまま)、ことといへば(言い合っても)、*直面なべければ(平行線になりそうなので)、出でたまふとて(大将はお帰りをなさろうとして)、*「直面(ひたおもて)」は<顔を隠さず面と向かうさま>と古語辞典にあるが、そう成るなら問題は無い訳で、そう成らなそうだから困っているのだから、この「直面」は<平行線>をいう古い数学用語と見做したい。

「ただ、いささかの隙をだに(ただ一寸だけでも、開けてください)」

と、いみじう聞こえたまへど(と大将は切望なさったが)、いとつれなし(返事は一言も無い)。

「怨みわび胸あきがたき冬の夜に、また鎖しまさる関の岩門 (和歌 39-20)

「降られて濡れて寒いのに、開かずの門とは情けない (意識 39-20)

*「関の岩門(せきのいはかど)」は天照大神が籠もったと言う「天の岩屋戸」にでも準えた言い方なのだろうか。大将が自分を須佐之男命に見立てる意図が有るのか無いのか、有ったとして如何いう意義なのか、などはさっぱり分からないが、神話は限りなく卑猥な印象が私にはあって、歌筋に関わらず、情交の誘い掛けが歌の味わいに思えてならない。詠み言葉の組み立てについては、「開く(あく)」「鎖す(さす)」「堰く(せく)」は「門(かど)」の縁語で、最期に「門」を持って来てまとめてある。「冬」は「振ゆ(「振る」の古語)」に掛かっているのだろう。歌筋は「うらみわび」と泣き節で、言い回しの工夫は「開き難し」の上にまた「鎖し増さる」と堅さを重ねて困難さを訴えている、ようだ。

聞こえむ方なき御心なりけり(言葉も無い呆れた御心なんですね)」

と、泣く泣く出でたまふ(と大将は泣く泣くお帰りになります)。